

宮坂 静生薦 岳 3月



悔い残るものよ介護は模植の実
初詣石垣のごと頭の羅列り
大白菜刃に驚きて裂けにけり
皿鉢の音たてぬやう大晦日
人間の小さく見ゆる山火事
五十集屋や木桶にひそむ寒海
五い雪嶺や狐の守る祝
飽食の民に入日や枯芭
捨て難きものに重さのなき枯
冬林檎着くや合唱ハモるやう
翌檜はあすなろのまま年迎ふ
折り畳み傘とはたちと初雪と
柏汁や天売り焼やき尻吹曝
梟の飾らざる声生きるとは

*
縫ひ初めの扱く音色に光射す
天界を暴れ放題雪しまく
パソコンに木乃伊のほひ除夜の大樹
クリスマスツリーメルケルとう大樹
戦後永し語り尽くししごと冬木
初日の出たちまち霧らふ山の牧
叩き牛蒡北の大地の香を放つ
面影は言葉を持たず冬銀河
雪嶺や信濃の闇にかしづかれ
白慈姑長持唄の遠くより
糸雲頬寄せて吹く葛湯かな
餃市や日の沈むまで子でゐたし
のくとばつこ駱駝の貌の乾びをり
凍蝶やいのちゅつくり使ひたる
大年や紅の魚かて雪の飯まし
のくとばつこ駱駝の貌の乾びをり
縫ひ初めの扱く音色に光射す
天界を暴れ放題雪しまく
パソコンに木乃伊のほひ除夜の大樹
クリスマスツリーメルケルとう大樹
戦後永し語り尽くししごと冬木
初日の出たちまち霧らふ山の牧
叩き牛蒡北の大地の香を放つ
面影は言葉を持たず冬銀河
雪嶺や信濃の闇にかしづかれ
白慈姑長持唄の遠くより
糸雲頬寄せて吹く葛湯かな
餃市や日の沈むまで子でゐたし
のくとばつこ駱駝の貌の乾びをり
凍蝶やいのちゅつくり使ひたる
大年や紅の魚かて雪の飯まし
のくとばつこ駱駝の貌の乾びをり
縫ひ初めの扱く音色に光射す
天界を暴れ放題雪しまく
パソコンに木乃伊のほひ除夜の大樹
クリスマスツリーメルケルとう大樹
戦後永し語り尽くししごと冬木
初日の出たちまち霧らふ山の牧
叩き牛蒡北の大地の香を放つ
面影は言葉を持たず冬銀河
雪嶺や信濃の闇にかしづかれ

雄長万寿美子 石井紀美子 平松枝里子
竹村慶子 若月楽章 古畑富美江 長尾裕美子
神林利一 中里結 佐藤映二 渡辺真帆 許勢元貞
珠凪夕波 萩原昭廣

田川節子 新野加代子 降旗康 度久山和子
木村由里子 伊藤由希子 秦順子 宮地和子
渡久山和子 伊藤由希子 秦順子 宮地和子
後藤行雄 依田ひろ 岩井かりん 奥山源丘
辰野利彦 大野今朝子 岩井かりん 奥山源丘

岳俳句の現在 三月

(511)

宮坂 静生

— 同人集・岳集・青雲集から

卷頭寸言。籠居の暮らしさからだばかりでなく、頭の働きも鈍る。「歩きながら考える」タイプなので、歩かないと感性も閃かない。その中で、信州大学グローバル化推進センターのプログラムの一環として、西シベリアのノヴォシビルスク大学日本語日本文化専攻の学生に俳諧・俳句の講義をズームで行った。三月には俳句実作にも挑戦してもらう予定だ。小林貴子、矢島恵にも活躍してもらう。シベリアは未開の地などというイメージが吹っ飛ぶほどに、上記の大学はロシア第三の大都会にあり、明るく、ロシアの知性の拠点でもあるとか。日本は、いや私は狭いと実感している。

言葉を超えた領域も言葉が暗示する——面影とは

面影は言葉を持たず冬銀河 岩井かりん

感動した場面を想像されたい。面影（イメージ）は立つ。が、名前（意味）が出てこない。亡き人が不意に思い浮かぶときにもそんな経験がある。掲句はそれ。冬銀河の背景が永遠の世界を暗示するようだ。ことばは意味とイメージとが合体したもの。ことばを超えた感動を考えると、意味は不要のようであるが、感動を記憶するには意味の貯蔵庫が必要で

ある。しかし、俳句は意味が優先する記憶に頼り過ぎないで、現場に触れる大きさを暗示したい。その例として、私は

掲句を鑑賞したい。

雪嶺や信濃の闇にかしづかれ 奥山 源丘

鮮やかな雪嶺は信濃の真冬の闇が育てたもの。そうに違いない。すでに言われたようでありながら、このように愛情深く雪嶺を見た俳句はなかったのではないか。他者の眼がいい。

叩き牛蒡北の大地の香を放つ 大野今朝子

北海道の牛蒡を手に入れたものか。俎板の上で悠々と叩いているさまはユーモラスである。たかが牛蒡に、これが大地の香と感動する大らかさがいい。

初日の出たちまち霧らふ山の牧 窪田 英治

元日も山の自然はお日さまを霧に巻く。霧が込み、霧が匂い、霧が揺する。これが山国の日常。三百六十五日の重さを元日の霧で捉えた「軽み」がいい。

戦後永し語り尽くししごと冬木 辰野 利彦

目の前にある一本の冬木。戦後のわが泣き笑いのすべてを知っている。冬木がそのように語ってきた。あのときもこのときも。戦後は私には総じて冬の時代だ。これも冬木から。

クリスマスツリーメルケルとう大樹 依田 ひろ

ベルリンの壁崩壊後のドイツ連邦共和国を十六年間統率して引退した、初の女性首相メルケルは大樹。大きな聖樹だと。EUヨーロッパ連合について、ロシア語も堪能と、外交能力抜群。権利の究極は欲望、環境とは相入れない。大きな矛盾を抱えることで成長する術を探った稀な政治家。世界にクリスマスツリーを立てた人。発想が豊かな句。

天界の暴れ放題雪しまく 宮地 和子

縫ひ初めの扱く音色に光射す 渡久山和子

宮古島在住のデザイナー。「扱く音色」に感心した。それが仕事始めとは、気持が籠っている。かつてNHK俳句を担当しテレビに出ていた頃、芭蕉布の夏シャツを貰った。あの光沢は今も大事にしている。ここは音色。光が音に。

のくとばっこ駱駝の貌の乾びをり 秦 順子

伊吹風に、名古屋もそんな日があるのであろうか。または旅いか。天界への着目がちまちましないで大きい。雪の日は雪に堪える。そんな人柄が伝わる。

飴市や日が沈むまで子でゐたし 伊藤由希子

パソコンに木乃伊のにほひ除夜の鐘 後藤 行雄
しばし唸った。いま使っているパソコンが木乃伊とは。私の抜け殻。一年間精魂込めて脳を絞り、叩いてきた智慧がみんなパソコンの中。消えたら文字通り私が消えたも同然。しかし、パソコンは無機質の機器。血が通つてゐるわけではない。ミイラとはなるほどと感心する。

パソコンに木乃伊のにほひ除夜の鐘 後藤 行雄

千葉あたり、関東方言である。動物園の駱駝か。日本の駱駝はいわれてみるとみんな貌がかさかさ。哀れこの上ない。

大年や紅の魚かて雪の飯 木村由里子

信州松本では、かつての塙市が飴市になった。一日、大人も子どもでいたい。そんなナイーブな気持を持ち続けたいものだ。秋田在住の作者。秋田にも飴市があるといいね。

凍蝶 やいのちゅつくり使ひたる 降旗 康

表現に通俗のひねりがみえるが、さすがに実感が籠る。

茜雲頬寄せて吹く葛湯かな 新野 加代

空には茜雲、仲良くあつあつの葛湯を吹く。吉野あたりでの旅の一齣か。「頬寄せて」に葛湯がうつとり。素朴。純情な嫁とり幻想か。鄙びた空気が心地よい。

白慈姑長持唄が遠くより 田川 節子

木曾あたりの祭が目に浮かぶ。地のご馳走を食べて、聞こえてくるのが長持をぎしぎし軋ませる長持唄。あるいは昔風な嫁とり幻想か。鄙びた空気が心地よい。

梟の飾らざる声生きるとは 萩原 昭廣

地の声で鳴く梟。ほうほうは精一杯生きている感じだ。生きものはみんなぎりぎりのところで生きている。人間だけが余裕を生んで余力が文化を作り出した。文化により賢くもなり、素朴な自然からは遠のいた。いつかぎりぎりを考えないといけない時がくる。時代は急速にぎりぎりに向っているのではないか。

熱心な作者。執心が本物になりつつある。

今月の秀句

北海道の吹曝しの手強さ——自然探求の最前線

粕汁や天売焼尻吹曝し 許勢 元貞

北海道の留萌の羽幌から天売・焼尻へ渡る。そこは高台状の島で、冬はシベリア風が強烈とか。粕汁に温まりじっと春を待つ。地名が凄い。お手上げの感じ。短詩俳句の力が滲む。

折り畳み傘とはたちと初雪と 珠皿 夕波

いつ折り畳み傘を持つようになつたか。ちょびりお洒落。はたちも初雪も。私にも、そんな時があった。夢中で目の前のことこなすのに一生懸命であった頃。頭ばかりが膨らんで、足は速足。口から出るサルトルもマルクスも、観念だけが生き生き。虚子の「花鳥諷詠」は生ぬるい……、と、たちまち過ぎてしまったあの日。作者はいま少し距離を置いて、二十歳を愛しんでいる。私の戦後とは違う、やさしい時代のやさしい青春。

翌檜はあすなるのまま年迎ふ 渡辺 真帆

ひのきを夢見て。あすなろのよさこそ人情横溢。実人生だ。冬林檎着くや合唱ハモるやう 佐藤 映二

ハーモニーが揃うのがハモる。冬林檎の輝きがわっと迫る。林檎よりも寒さに頬を赤くした冬林檎が並んだ。大きな口を開けて。軽く、比喩が適切。決まっている。

捨て難きものに重さのなき枯野 中里 結

「重さのなき枯野」とは長い老いの道筋を捉え、巧みな表現だ。それほどの思案する悩みがなかつたら、捨て難い。苦労性には、却つて軽さは辛い。が、堪えるのが人生であろう。

飽食の民に入日や枯芭蕉 神林 利一

これが現代。満腹のみなの衆、入日を仰ぐ枯芭蕉。動きようがない。このまま、いかなる未来を模索するのか。はた地球は沈没するのか。権利を守れば、環境は悪化の一途。さて。

たましひは年取らぬとふ旅始め 長尾裕美子

魂が老いたとは確かに聞かない。旅は魂を鍛えるものか。

雪嶺や狐の守る祝殿 古畑富美江
輝く雪嶺の下、お稻荷さんを想像する。句はバランス。

五十集屋の木桶にひそむ寒海鼠 後藤 涙子

五十集屋は魚の乾物屋。寒海鼠がいい。身に沁みる底の景。

人間の小さく見ゆる山火事よ 若月 楽章

「山火事」を背景に人間を置く。世界の山火事。合衆国でもオーストラリアでも、手が付けられない。環境破壊告発。

皿鉢の音たてぬやう大晦日 竹村 慶子

青雲集

大白菜刃に驚きて裂けにけり 平松枝里子

刃を当てるやいなや、白菜の方からぱかっと割れる。発見がある。キヤべツも西瓜も、充実とはこのようなものか。

初詣石垣のごと頭の羅列 石井紀美子

比喩が最高。ひと様の頭を「石垣」とは。雑踏に並ぶごろごろの石頭でもこれだけの無機質化は告訴もの。面白い。

悔い残るものよ介護は榎樁の実 雄長万寿美

なぜ「榎樁の実」なのか。悔いの気持の喩いでこぼこな榎樁の実を置いた。やるせなさがあとまで引いて。

岳集、青雲集から推薦候補作をあげる。

美ら島や花汲むやうに若水を 田村 道子

遠野火よ連絡を断つ妹よ 吉澤 利枝

二日はやカサブランカの蕊を掃く 阿部 萌子

水底に灯るかにカフェ冬木立 海野 恵子

竹釘は樽の命や初仕事 田中とし子

我が生涯大つごもりのやうなもの 西澤よし子

切り漬けの酸っぱさが好き飛驒の冬 滋子

懐かしい。これぞ日本のしつけ。食べる時にも厨でも。

○このように推敲し、添削する

原句 慈母観音乳房豊かに北風に絶え

添削 慈母観音乳房豊かに北風の中

「絶え」は堪えている意なら「堪え」。ここはそこまでいわず、「北風の中」(きたのなか)くらいがいい。句に豊かな情感があるので最後はあっさりと受ける感じ。これがコツ。

原句 年の湯に無病を感謝窓の月

添削 年の湯に無病を感謝つかりけり

「窓の月」は余分。上、中の表現で十分。それだけでいい。

原句 どこまでも凧上がりゆけ初御空

宮澤 朝子

添削 どこまでも凧上がりゆけ信濃空

宮澤 朝子

新年の「初御空」でも悪くない。が、凧が春(正月に多く用いられる)の季語なので、居住地「信濃空」くらいにして、

一句に季語は一つに絞った方がいい。

原句 まず一步まず一日の新年や

遠藤 洋子

添削 まず一步まず一日の年新た

丸山 盛久

「新年や」が気になる。浮いた感じを抑え、「年新た」に。

原句 常念岳の雪今年早いの便り来ぬ

佐藤 悅雄

添削 常念岳の雪の便りのとどきけり

佐藤 悅雄

「今年早い」は言い方が気になる。「雪の便り」でよくはな

いか。大方、雪が来た直後に話題になる。それだけで雪が早いことを感じるのが、季節感に敏感な生活人であろう。この

上石 哲男

山崎 哲行

長谷川陽子

松原壽美子

感覚は大変大事なところですね。

原句 成人の日娶をあげて行く子かな

重親 利行

添削 嬢あづけ成人式に行く子かな

リズミカルに。同じ意味でも、一句を読んだ楽しさは調子がいい方が優る。現代の若者の「やるねえ」の感じ。

原句 心凍て言葉一つ紡げぬ夜

添削 心凍て言葉一つ紡げざり

「紡げぬ夜」の表現が窮屈。「夜」が要らない。重いことはさらっと表現すると、かえって心に響く。これがコツ。

原句 本心は夫に言えずに雪婆

長谷川陽子

添削 本心はだれにも言えず雪婆

佐藤 悅雄

「夫に」を「だれにも」にしたら。かえって深刻にならな

いで「雪婆」に託した人物像が面白い。

原句 粕汁に盃を重ねる老夫婦

佐藤 悅雄

添削 粕汁に盃を重ねる共白髪

佐藤 悅雄

「老夫婦」は同じ意味でも幾分の詩情を醸す言い方を。

原句 行く秋や義民の村の暮太鼓

若尾 伸子

添削 行く秋や義民祭の太鼓打つ

若尾 伸子

「暮太鼓」が気になる。夕方の太鼓とは、イメージが浮かばない。義民祭として、そこで太鼓を打つくらいでどうか。

原句 木の葉髪鏡に向ふ我なれし

船坂 昌文

添削 一日に一度鏡に木の葉髪

船坂 昌文

原句では当たり前のことで、大胆に添削した。気になって毎

日鏡の前に立つ。飛驒高山の熱心な作者。期待している。